

教育研究業績書

2024年05月20日

所属：看護学科

資格：准教授

氏名：深山 華織

| | |
|-------------------------|-------------------------|
| 研究分野 | 研究内容のキーワード |
| 地域・在宅看護学, 高齢者看護学, 家族看護学 | 就労介護者, 仕事と介護の両立, 介護離職予防 |
| 学位 | 最終学歴 |
| 博士(看護学) | 大阪市立大学大学院看護学研究科後期博士課程 |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|---|-----------------|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 教育方法の実践例 | | |
| 1. 総合研究における報告会の実施 | 2011年4月～2024年3月 | 大阪府立大学 看護学部・看護学類の助教・講師として、「総合研究」(専門科目、4年次、通年、必修2単位)において、報告会の場を設け、学生個々で自分の研究についてプレゼンテーションした。報告会は、研究計画書の作成、研究の中間報告など時期に合わせて行い、在宅看護学分野の学生同士で意見交換を行った。また、研究の終了後は、地域看護学分野、精神看護学分野と3分野合同で研究成果の発表会を開催した。学生は他分野の学生とのディスカッションを通じ、卒後の看護研究への動機づけになった。 |
| 2. 総合実習における臨地実習およびプレゼンテーション | 2011年4月～2024年3月 | 大阪府立大学 看護学類の助教・講師として、「総合実習」(専門科目、4年次、半期、必修2単位)において、病院の退院調整部署、訪問看護ステーション、療養通所介護、看護多機能小規模施設での実習を実施した。「総合実習」は統合科目に位置付けられており、学生には卒後の組織の一員としての役割や管理など広い視点での理解が求められる。学生は、地域包括ケアシステムのなかで、対象者を病院や看護、介護など一体的に支えることの必要性を理解できた。また、実習最終日には、自分たちの関心のあるテーマについて、実習での体験のほか、文献レビューを踏まえて考察したプレゼンテーションを実施し、学生の主体的な学習を促し、新たな気づきを得ることができた。 |
| 3. 在宅看護学実習における臨地実習およびグループ間でのディスカッションの実施 | 2011年4月～2024年3月 | 大阪府立大学 看護学部・看護学類の助教・講師として、「生活支援看護学応用実習：Ⅱ」「生活支援看護学実習：在宅」(専門科目、3年次後期～4年次前期、通年、必修2単位)において、訪問看護ステーションでの実習を実施した。学生は受け持ち事例の一連の看護過程展開と、その他の事例への訪問を通じて、対象者の理解と看護実践に必要な技術を高められた。また、他のグループとのディスカッションを実施し、訪問看護ステーションの機能や訪問看護師の役割、多職種連携・協働の必要性について理解を深められた。学生の新たな気づきを促すとともに学習意欲の向上につながった。 |
| 4. 在宅看護学実習におけるルーブリック評価表の活用による学生の主体的な学習の促進 | 2011年4月～2024年3月 | 大阪府立大学 看護学部・看護学類の助教・講師として、「生活支援看護学実習：在宅」(専門科目、3年次後期～4年次前期、通年、必修2単位)において、ルーブリック評価表を作成し、学生に提示した。実習期間中、学生は、実習目標を到達するまでの基準がわかることで、学生の主体的な学習を促進できた。また、教員間での共通理解が深められ、評価基準を明確にできた。 |
| 5. DVD教材など動画を用いた講義、演習の実施 | 2011年4月～2024年3月 | 大阪府立大学および大阪公立大学 看護学部・看護学類の助教・講師として、「生活支援論・在宅Ⅰ」「生活支援論：在宅Ⅰ」(専門科目、2年次配当、半期、必修1単位)や「生活支援論・在宅Ⅱ」「生活支援論：在宅Ⅱ」(専門科目、3年次、半期、必修2単位)において、視聴覚教材を学生に視聴してもらった講義や演習を取り入れた。生活の場での看護実践や対象者の心情が |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|---|-----------------|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 教育方法の実践例 | | |
| 6. 呼吸器管理に必要な機器類の装着体験の導入 | 2011年4月～2024年3月 | イメージしにくい学生の理解を深め、興味・関心を引き出した。 大阪府立大学および大阪公立大学 看護学部・看護学類の助教・講師として、「生活支援論・在宅Ⅰ」「生活支援論：在宅Ⅰ」（専門科目、2年次配当、半期、必修1単位）や「生活支援論・在宅Ⅱ」「生活支援論：在宅Ⅱ」（専門科目、3年次、半期、必修2単位）において、人工呼吸器や在宅酸素等に医療機器類を業者に提供してもらい、学生が直接見て、触れ、装着するとい体験を通して、患者や家族の心情や生活での課題について考え、支援を検討する機会となった。また、在宅でのケアチームの一員である機器類の業者の役割や連携について考えることができた。 |
| 7. 演習への在宅看護実践の豊富な経験のある看護師による講和やティーチング・アシスタントの活用 | 2011年4月～2024年3月 | 大阪府立大学および大阪公立大学 看護学部・看護学類の助教・講師として、「生活支援論・在宅Ⅰ」「生活支援論：在宅Ⅰ」（専門科目、2年次配当、半期、必修1単位）や「生活支援論・在宅Ⅱ」「生活支援論：在宅Ⅱ」（専門科目、3年次、半期、必修2単位）において、訪問看護師による看護の実際についての講和を取り入れ、演習においても実践に即したフィードバックができるようにし、具体的な看護実践の理解を促せるようにした。 |
| 8. ループディスカッションやプレゼンテーションによる学生の学びの共有と新たな気づきの促進 | 2011年4月～2024年3月 | 大阪府立大学および大阪公立大学 看護学部・看護学類の助教・講師として、「生活支援論・在宅Ⅰ」「生活支援論：在宅Ⅰ」（専門科目、2年次配当、半期、必修1単位）や「生活支援論・在宅Ⅱ」「生活支援論：在宅Ⅱ」（専門科目、3年次、半期、必修2単位）において、演習では積極的にグループディスカッションやプレゼンテーションの機会をつくった。学生が個人の考えを述べるにとどまらず、他の学生の意見をもとに考えを深めることができた。また、グループでの意見をまとめ、スライドなどを用いてプレゼンテーションし、他のグループとのディスカッションも通して、学生の新たな気づきを促進できた。さらに、ピアレビューを取り入れ、学生のよい意見にも肯定的にフィードバックするよう促し自己肯定感も向上できるように促した。 |
| 9. 事前課題による動機づけと、演習後のレポート課題による学びの整理 | 2011年4月～2024年3月 | 大阪府立大学および大阪公立大学 看護学部・看護学類の助教・講師として、「生活支援論・在宅Ⅰ」「生活支援論：在宅Ⅰ」（専門科目、2年次配当、半期、必修1単位）や「生活支援論・在宅Ⅱ」「生活支援論：在宅Ⅱ」（専門科目、3年次、半期、必修2単位）において、演習を行う際には、学生に事前課題を提示し、主体的な学習を促した。事前課題をもとに演習に取り組んだ後は、事前課題や演習での学びを整理できるようレポート課題を課した。学生が提出したレポートには、学生にフィードバックし、授業での学びが臨地実習に活かせるようにした。 |
| 10. ロールプレイを取り入れた演習の実施 | 2011年4月～2024年3月 | 大阪府立大学および大阪公立大学 看護学部・看護学類の助教・講師として、「生活支援論・在宅Ⅰ」「生活支援論：在宅Ⅰ」（専門科目、2年次配当、半期、必修1単位）や「生活支援論・在宅Ⅱ」「生活支援論：在宅Ⅱ」（専門科目、3年次、半期、必修2単位）において、ロールプレイを取り入れた演習を行った。訪問看護の初回訪問時や胃瘻管理の必要な療養者などの場面設定を行い、学生は療養者、家族の役、そして訪問看護師役のそれぞれの役を演じることで、対象者の心情や課題に気づき、訪問看護師としての役割について検討ができた。また、観察者役として、ロールプレイを客観的にみた意見を述べることで、多角的な意見交換 |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|---------------------------------|------------------|--|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 教育方法の実践例 | | |
| | | を行い、学びがより深められた。 |
| 2 作成した教科書、教材 | | |
| 1. 在宅看護過程の演習および実習で使用する教科書の作成、活用 | 2019年11月～2024年3月 | 大阪府立大学 看護学部・看護学類の助教・講師として、「生活支援論：在宅Ⅱ」専門科目、3年次、半期、必修2単位）、「生活支援看護学実習：在宅」（専門科目、3年次後期～4年次前期、通年、必修2単位）において、演習および実習中の看護過程の際に、学生が対象者を強みと弱みをみて、総合的な理解ができるように示した教科書「強みと弱みからみた在宅看護過程＋総合的機能関連図」を制作に携わった。学生は、演習を発展させ、実際に受け持ち事例での看護過程において教科書を用いて理解が深められた。 |
| 2. 講義用スライドの作成 | 2011年4月～2024年3月 | 大阪府立大学および大阪公立大学 看護学部・看護学類の助教・講師として、「生活支援論・在宅Ⅰ」「生活支援論：在宅Ⅰ」（専門科目、2年次配当、半期、必修1単位）や「生活支援論・在宅Ⅱ」「生活支援論：在宅Ⅱ」（専門科目、3年次、半期、必修2単位）において、講義用資料や補助資料の記載内容だけでなく、写真や動画、具体的な事例などをスライドで提示し、学生が視覚的に理解できるように工夫した。 |
| 3. 講義用資料および補助資料の作成 | 2011年4月～2024年3月 | 大阪府立大学および大阪公立大学 看護学部・看護学類の助教・講師として、「生活支援論・在宅Ⅰ」「生活支援論：在宅Ⅰ」（専門科目、2年次配当、半期、必修1単位）や「生活支援論・在宅Ⅱ」「生活支援論：在宅Ⅱ」（専門科目、3年次、半期、必修2単位）において、講義に即した資料および補助資料を作成し、学生に配布した。資料には、講義で目指す目標や要点が分かるように提示した。また、講義の内容が、指定している教科書のどの部分に該当するのか資料に記載し、学生が復習しやすいように示した。 |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 1. 宅栄養専門管理栄養士による食支援の学習会の実施 | 2020年4月～2022年3月 | 訪問看護師の食支援に関する全人的ケアの知識・技術を向上させることを目的に、地域で積極的に食支援に関わっている在宅栄養専門管理栄養士による食支援の学習会を企画・実施した。講義と事例検討を組み合わせた学習会であったことから、基本的な知識とともに、実際の事例について丁寧に振り返り、管理栄養士から実践につながる具体的な助言を得られていた。 |
| 2. 高等学校での模擬授業の実施 | 2017年9月～2024年3月 | 大学へ依頼のあった高校へ訪問し、「在宅看護学ってどんなこと勉強するの？」などのテーマで模擬授業を実施した。 |
| 3. 地域包括ケア国際セミナーの開催 | 2016年4月～2017年3月 | 大阪府立大学大学院看護学研究科NS-Coプロジェクトの一員として、保健や医療・福祉に従事する者を対象としたセミナーの開催に係る調整や運営を行った。特に、「地域におけるエンド・オブ・ライフケア」をテーマに米国ハワイ州にあるHospice HawaiiからZeri氏を招へいし、米国における在宅ホスピスケアについて講演してもらい、日本の地域における地域包括ケアについてパネルディスカッションを行った。 |
| 4 その他 | | |
| 1. 抄読会の開催 | 2011年4月～2024年3月 | 大阪府立大学大学院および大阪公立大学大学院 在宅看護学分野の院生および修士、院生とともに研究や看護実践などについて報告し、ディスカッションする場をつくった。修士や院生の交流をとおして、今後の研究や看護実践のモチベーション維持・向上する機会となった。 |
| 2. アドバイザー制度の活用 | 2011年4月～2024年3月 | 大阪府立大学および大阪公立大学 看護学部・看護学類では、アドバイザー制度を導入しており、1年次から4年次の学生が情報交換できるミーティングの場をつくった。また、学生個々が学習の深達度や生活などに |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|--------------|-----|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 4 その他 | | |
| | | 課題がある場合は、適宜面談を行い、大学や家庭生活が問題なく送れるよう対応した。 |

| 職務上の実績に関する事項 | | |
|--|-------------------|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 資格、免許 | | |
| 1. 保健師免許 | 2009年5月 | |
| 2. 看護師免許 | 1999年4月 | |
| 2 特許等 | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 1. 大阪公立大学 実践看護科学領域 生活支援看護科学分野 在宅看護学（※統合により2022年度より所属名変更） | 2022年4月～2024年3月 | 専任講師として、教育や研究、社会貢献活動等を実施した。 |
| 2. 大阪府立大学 地域保健学域 看護学類 生活支援看護学領域 在宅看護学分野（旧：大阪府立大学 看護学部 生活支援看護学領域 在宅看護学分野 ※2012年より所属学域名変更） | 2011年4月～2024年3月 | 助教、専任講師として、教育や研究、社会貢献活動等を実施した。 |
| 3. 訪問看護師 | 2007年11月～2010年10月 | 大阪府下の3か所の訪問看護ステーションで非常勤訪問看護師として勤務した。在宅でさまざまな健康問題や生活課題をもつ療養者とその家族が住みなれた生活の場で安心して安全に暮らし続けられるように多職種と連携・協働し支援した。 |
| 4. 大阪赤十字病院 看護師 | 1999年4月～2007年3月 | 循環器内科・心臓血管外科病棟/CCUに勤務した。集中治療が必要な急性期状態の患者から治療によって回復し、退院できる慢性的な治療継続が必要な患者まで幅広い病期や課題のある患者の支援を行った。患者が退院後も健康や生活における自己管理が必要となり、退院後の生活を見据えた支援などを行った。 |
| 4 その他 | | |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|--|---------|-----------|-------------------|--|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 1 著書 | | | | |
| 1. 強みと弱みからみた地域・在宅看護過程+総合的機能関連図 第2版 | 共 | 2023年1月 | 医学書院 | 指定規則の改正を踏まえて「地域・在宅看護」とし、さらに系統的に看護過程を展開できるように改訂した。 A5判全590頁 編者：河野あゆみ 共著者：深山華織ほか 本人担当部分：「第2章 16関節拘縮」（p.290～p.303） 関節拘縮をめぐる在宅看護、情報収集のポイント、事例紹介、事例の看護過程、関連図などを担当した。 |
| 2. 強みと弱みからみた在宅看護過程+総合的機能関連図 | 共 | 2018年12月 | 医学書院 | 在宅看護過程を学ぶための学習書であり、特に訪問看護実習や演習で活用されることを想定し制作した。本書の在宅看護過程では、総合的機能ををみる視点と、強みと弱みをみる視点が特長である。 A5判全574頁 編者：河野あゆみ 共著者：深山華織ほか 本人担当部分：「第2章 16関節拘縮」（p.277～p.290） 関節拘縮をめぐる在宅看護、情報収集のポイント、事例紹介、事例の看護過程、関連図などを担当した。 |
| 3. 教員・訪問看護師・学生すべてが活用できる 在宅看護の実習ガイド 事例とSTEPで可視化・言語化する | 共 | 2017年3月 | 日本看護協会出版会 | 在宅看護の実習がどのように行われているか、全国の大学からの報告で明らかにした。さまざまな報告から導き出された「ここだけは押さえておきたい実習のポイント」を4つのSTEPに整理した。 A4判全187頁 編者：清水準一、柏木聖代、川村佐和子 共著者：中村裕美子、岡本双美子、深山華織 本人担当部分：「第5章：展望 「ルーブリック自己評価表」を使用 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|--|-------------------|--------------------------------|--|---|
| 1 著書 | | | | |
| | | | | <p>して“在宅看護”実習の目的・目標が明確に」(p.158～p.163)</p> <p>在宅看護学実習は、学生にとってその目的や目標がつかみにくく、教員にとって評価のばらつきが生じやすい実習である。そこで、大阪府立大学では「ルーブリック自己評価」を使った実習の評価方法を開発した。学生の主体的な学習を導く効果を紹介した。</p> |
| 2 学位論文 | | | | |
| <p>1. 就労介護者の仕事と介護役割間の葛藤とケアマネジャーによる就労継続支援の判断、就労介護者の特性との関連（博士論文）</p> <p>2. 日中独居で過ごす要介護高齢者の抱えている不安を生じさせる事柄と対処（修士論文）</p> | | <p>2022年9月</p> <p>2011年3月</p> | <p>大阪市立大学大学院</p> <p>大阪府立大学大学院</p> | <p>目的：本研究では、就労介護者の仕事と家庭役割間との葛藤とケアマネジャーによる就労継続支援の判断および就労介護者の特性との関連を明らかにする。</p> <p>方法：対象者は、全国の居宅介護支援事業所を利用する就労介護者および担当ケアマネジャー各3,000名とした。郵送による無記名自記式調査を実施し、各対象者 696名を分析対象とした。就労介護者には、基本属性やワーク・ファミリー・コンフリクト（WFC）尺度日本語版により仕事と家庭役割間の葛藤等を把握した。ケアマネジャーには、基本属性や介護者の就労継続のための4種類の支援（負担軽減支援、心理的支援、チーム間の関係調整、不在時の環境調整）について必要性の判断等を把握した。</p> <p>結果：就労介護者の平均年齢は57.2（SD8.8）歳で、女性が79.3%であった。WFC得点では、WIF得点は2.8（SD0.7）点、FIW得点は2.5（SD0.7）点であった。ケアマネジャーが心理的支援の必要性が高いと判断している就労介護者は、必要性が低いと判断している就労介護者と比較してWIFが高かった（OR=2.44, CI=1.33-4.48）。</p> <p>目的：同居家族の就労により日中独居で過ごす要介護高齢者の不安を生じさせる事柄とその対処について明らかにすることである。</p> <p>方法：対象は訪問看護を利用している日中独居高齢者9名とし、調査は半構成的面接法を用いて、質的記述的に分析した。</p> <p>結果：日中独居高齢者は、不自由な身体からひとりでの【事故の起こりやすい生活】【自分の望まない範囲に定められた環境】【孤独を感じる静かな空間】【孤立した無為な生活】によって不安を抱きながら過ごしていた。これら不安への対処として、問題焦点型対処と情緒焦点型対処を行っていた。</p> <p>A4判94頁</p> |
| 3 学術論文 | | | | |
| <p>1. 就労介護者の仕事と家庭役割間の葛藤と就労継続への意思との関連（査読付）</p> <p>2. Does Long-Term Care Literacy Matter in Evaluating Older Care Recipients' Satisfaction with Care Managers? Empirical Evidence from Japanese</p> | <p>共</p> <p>共</p> | <p>2023年12月</p> <p>2023年3月</p> | <p>日本地域看護学会</p> <p>第26巻 3号 p.13～p.20</p> <p>International Journal of Environmental Research and Public Health</p> <p>第20巻 3号</p> | <p>目的：就労介護者の仕事と家庭役割間における葛藤と就労継続への意思との関連を明らかにする。</p> <p>方法：対象者は就労介護者3,000名とした。郵送で無記名自記式調査を実施、696名（有効回答率23.2%）を分析対象とした。調査内容は、基本属性や仕事とワーク・ファミリー・コンフリクト（WFC）尺度（WIF：仕事から家庭への葛藤、FIW：家庭から仕事への葛藤）、退職・転職・就業形態変更への意思とした。</p> <p>結果：対象者のうち退職、転職、就業形態変更の意思がある者は、それぞれ36.2%、24.4%、41.4%であった。ロジスティック回帰分析の結果、WIF高群は低群より、退職の意思（OR=1.57, 95%CI=1.09-2.27）、転職の意思（OR=2.25, 95%CI=1.47-3.45）、就業形態変更の意思（OR=2.84, 95%CI=1.97-4.10）があった。また、FIW高群は低群より退職の意思（OR=1.52, 95%CI=1.06-2.17）、転職の意思（OR=2.37, 95%CI=1.57-3.58）、就業形態変更の意思（OR=2.14, 95%CI=1.51-3.04）があった。</p> <p>本人担当部分：研究計画、データ収集、分析、論文執筆 共著者：深山華織、河野あゆみ</p> <p>目的：本研究では、65歳以上の日本人を対象としたユニークな個人データセットを用いて、介護受給者（現在正式な介護サービスを受けている高齢者）の介護リテラシーに焦点を当て、ケアマネジャーに対する満足度との関係を検討した。</p> <p>方法：無回答バイアスの問題に対処するため、逆確率重み付けとHeckmanプロビットモデルを推定に適用した。</p> <p>結果：高齢者がケアマネジャーの測定に関する6つの側面について満足度を評価する確率は、ケアリテラシーのレベルが高くなるにつれて高くなることがわかった。しかし、ケアマネジャーに対する満足</p> |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|---|---------|-----------|--------------------------------------|---|
| 3 学術論文 | | | | |
| Survey Dat (査読付) 3. 就労介護者の仕事と介護役割間の葛藤とケアマネジャーによる就労継続支援の判断、就労介護者の特性との関連 (査読付) | 共 | 2022年7月 | 日本看護科学会誌 第42巻 p.31～p.39 | 度については、ケアリテラシーが高くなるにつれて、「説明力」と「態度・マナー」のみ有意な増加が認められた。また、高齢者の満足度の評価過程には、年齢、性別、家族構成、要介護認定レベル、ケアマネジャーを選んだ理由、介護サービスの利用状況、高齢者の回答方法などの共変量も関連していた。日本では、介護保険制度に基づく正式な介護サービスの利用は複雑で、高齢者にとっては理解しにくいこともある。今回の調査では、介護を受ける高齢者の35%が介護リテラシーが不十分であった。高齢者のケアリテラシーを向上させることは、正式な介護サービスをよりよく利用し、満足度を高めるために重要である。 本人担当部分：データ分析、論文執筆 共著者：Wang Z, Kaori Fukayama, Bing Niu 目的：本研究では、就労介護者の仕事と家庭役割間との葛藤とケアマネジャーによる就労継続支援の判断および就労介護者の特性との関連を明らかにする。 方法：対象者は、全国の居宅介護支援事業所を利用する就労介護者および担当ケアマネジャー各3,000名とした。郵送による無記名自記式調査を実施し、各対象者 696名を分析対象とした。就労介護者には、基本属性やワーク・ファミリー・コンフリクト (WFC) 尺度日本語版により仕事と家庭役割間の葛藤等を把握した。ケアマネジャーには、基本属性や介護者の就労継続のための4種類の支援 (負担軽減支援、心理的支援、チーム間の関係調整、不在時の環境調整) について必要性の判断等を把握した。 結果：就労介護者の平均年齢は57.2 (SD8.8) 歳で、女性が79.3%であった。WFC得点では、WIF得点は2.8 (SD0.7) 点、FIW得点は2.5 (SD0.7) 点であった。ケアマネジャーが心理的支援の必要性が高いと判断している就労介護者は、必要性が低いと判断している就労介護者と比較して、WIFが高かった (OR=2.44, CI=1.33-4.48)。 本人担当部分：研究計画、データ収集、分析、論文執筆 共著者：深山華織, 河野あゆみ |
| 4. 介護支援専門員による家族介護者の就労継続のための支援 (査読付) | 共 | 2020年12月 | ケアマネジメント学 第19号 p.67～p.78 | 目的：ケアマネジャーが、家族介護者の就労継続のためにどのような支援を行っているかを明らかにする。 方法：対象者は、就労介護者を支援しているケアマネジャー9人で、就労介護者の14事例に対する支援内容について半構成的面接調査を行った。データ分析は、佐藤の分析法をもとに定性的コーディングを行った。 結果：ケアマネジャーが介護者の就労継続のために行っている支援として、4つの支援【不在時の環境調整】【負担軽減支援】【心理的支援】【チーム間の関係調整】に分類できた。 本人担当部分：データ収集、分析、論文執筆 共著者：深山華織, 河野あゆみ, 白澤政和, 高砂裕子, 白木裕子, 畑亮輔 |
| 5. 在宅看護学実習における学生のルーブリック自己評価表を用いた学習活動の効果 (査読付) | 共 | 2018年3月 | 大阪府立大学看護学雑誌 第24巻 第1号 p.49～p.56 | 目的：在宅看護学実習において、学生のルーブリック自己評価表を用いた学習活動の効果を明らかにする。 方法：在宅看護学実習の履修学生を対象とし、介入内容として、実習中、学生は自己評価表を用いて中間評価と最終評価を記載した。データ収集方法は、実習開始前と実習終了時に自記式質問紙調査を行った。調査内容は、学習活動自己評価、使用頻度等とした。 結果：自己評価表の使用頻度が多い学生は、経験した事や学んだことを活かしながら、「実習目標の達成をみざす行動」「グループメンバーとのコミュニケーション」をとり、主体的に学習活動に取り組んでいた。 本人担当部分：研究計画、データ収集、分析、論文執筆 |
| 6. 同居家族の就労により日中独居で過ごす要介護高齢者の不安とその対処 (査読付) | 共 | 2015年3月 | 老年看護学 第19巻 第2号 p.75～p.84 | 目的：同居家族の就労により日中独居で過ごす要介護高齢者の不安を生じさせる事柄とその対処について明らかにすることである。 方法：対象は訪問看護を利用している日中独居高齢者9名とし、調査は半構成的面接法を用いて、質的記述的に分析した。 結果：日中独居高齢者は、不自由な身体からひとりでの【事故の起こりやすい生活】【自分の望まない範囲に定められた環境】【孤独 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|--|---------|-----------|--|--|
| 3 学術論文 | | | | |
| | | | | を感じる静かな空間】【孤立した無為な生活】によって不安を抱きながら過ごしていた。これら不安への対処として、問題焦点型対処と情緒焦点型対処を行っていた。 本人担当部分：研究計画、データ収集、分析、論文執筆 |
| その他 | | | | |
| 1. 学会ゲストスピーカー | | | | |
| 1. 「研究論文賞受賞講演」 日中独居ですぐす要介護高齢者と就労しながら介護をする介護者への支援に関する研究 | | 2017年6月 | 日本老年看護学会第22回学術集会 研究論文賞受賞講演 (於浜松医科大学) | 一般社団法人老年看護学会 平成28年度 研究論文奨励賞受賞し、受賞講演を行った。 論文名：同居家族の就労により日中独居ですぐす要介護高齢者の不安とその対処 発表者：深山華織 |
| 2. 学会発表 | | | | |
| 1. Support Status of Working Caregivers in Relation to Work-Family Conflict (査読付) | 共 | 2023年6月 | IAGG Asia / Oceania Regional Congress 2023 (於パシフィコ横浜) | 目的：就労介護者のサポート状況とワーク・ファミリー・コンフリクトとの関連を明らかにすることとした。 方法：対象者は、全国の居宅介護支援事業所を利用する就労介護者3,000名と担当ケアマネジャーとした。郵送による無記名自記式調査を実施し、696名を分析対象とした。 就労介護者には、インフォーマル・サポートの有無、ワーク・ファミリー・コンフリクト尺度日本語版(WFCS)等を把握した。ケアマネジャーには、フォーマル・サポートとしてサービス利用の有無、訪問や連絡の頻度を把握した。 多変量ロジスティクス回帰分析にて検証した。 結果：インフォーマル・サポートがない就労介護者はWIFが高かった。福祉用具貸与や住宅改修のサービス利用者は、WIFが低かった。ケアマネジャーが月1回以上会う就労介護者はFIWが高かった。 本人担当部分：研究計画、データ収集、分析、論文執筆 共著者：深山華織、河野あゆみ |
| 2. 訪問看護師による栄養アセスメントシート及びモニタリングシート活用成果 (査読付) | 共 | 2022年7月 | 第27回 日本在宅ケア学会学術集会 (於一橋大学, WEB開催) | 目的：訪問看護師が食支援の必要な在宅療養者の食事摂取状況や栄養状態を把握し、適切な支援を行うための栄養アセスメントシート及びモニタリングシートを作成した。本研究では、訪問看護師による本シート活用成果を明らかにした。 方法：本研究の対象者は、本シートを活用した3か所の訪問看護ステーションに所属する訪問看護師9名とし、グループインタビューを実施した。 結果：訪問看護師による栄養アセスメントシート及びモニタリングシート活用成果として、4カテゴリ【食・栄養の支援に必要な知識や視点の再認識】【療養者の課題と経過の明確化】【根拠に基づいた効果的・継続的な支援の実施】【多職種との連携・協働による支援の促進】が生成された。訪問看護師は栄養アセスメントシートの活用により、必要な情報を収集し、丁寧にアセスメントすることで課題を導くことができた。また、課題に対して在宅栄養専門管理栄養士による科学的根拠に基づいた実践的助言をもとに支援を行い、モニタリングシートを用いて定期的に評価することで継続的な支援ができていた。 本人担当部分：研究計画、データ収集、分析、論文執筆 共著者：深山華織、三輪恭子、時岡奈穂子 |
| 3. How Caregivers with Outside Jobs are Influenced by Work and At-Home Caregiving Conflicts when Deciding on Continuing Outside Work (査読付) | 共 | 2022年4月 | 25th East Asia Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference (於台湾, WEB開催) | 目的：就労介護者の仕事と家庭役割間の葛藤と就労継続への意思との関連を明らかにすることとした。 方法：対象者は、全国の居宅介護支援事業所を利用する就労介護者3,000名とした。郵送による無記名自記式調査を実施し、696名を分析対象とした。就労介護者には、基本属性やワーク・ファミリー・コンフリクト尺度日本語版により仕事と家庭役割間の葛藤、就労継続への意思として退職・転職・就業形態変更の意思等を把握した。 結果：WIF・FIWが高い就労介護者は、WIF・FIWが低い者と比較して、退職や転職、就業形態の変更をする意思があった。また、過去に介護を理由とした離職経験のある者は、経験のない者と比較して退職や転職をする意思があり、介護負担感のある者は、ない者と比 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|---|---------|-----------|------------------------------|--|
| 2. 学会発表 | | | | |
| 4. 就労介護者の仕事と家庭役割間の葛藤とケアマネジャーによる就労継続支援の判断との関連（査読付） | 共 | 2021年12月 | 第41回 日本看護科学学会学術集会（WEB開催） | <p>較して就業形態変更の意思があった。</p> <p>本人担当部分：研究計画、データ収集、分析、論文執筆 共著者：深山華織，河野あゆみ</p> <p>目的：就労介護者の仕事と家庭役割間の葛藤とケアマネジャーによる就労継続支援の判断との関連を明らかにすることとした。</p> <p>方法：対象者は、全国の居宅介護支援事業所を利用する就労介護者および担当ケアマネジャー各3,000名とした。</p> <p>結果：ロジスティック回帰分析の結果、ケアマネジャーが心理的支援を必要と判断している就労介護者は、健康状態や暮らし向きが悪いと考えており、労働時間が長く、WIF（仕事から家庭への葛藤）が高かった。</p> <p>本人担当部分：研究計画、データ収集、分析、論文執筆 共著者：深山華織，河野あゆみ</p> |
| 5. 在宅栄養専門管理栄養士による訪問看護師への食支援に関する学習会の効果（査読付） | 共 | 2021年8月 | 第26回 日本在宅ケア学会学術集会（於広島国際会議場） | <p>目的：訪問看護師が認識する食支援に関する課題と、在宅栄養専門管理栄養士による学習会の効果を明らかにすることを目的とした。</p> <p>方法：対象者は、在宅栄養専門管理栄養士による食支援に関する学習会に参加した2ヶ所の訪問看護ステーションに所属する訪問看護師11名とし、グループインタビューを実施した。</p> <p>結果：訪問看護師が認識する食支援に関する課題として、【療養者と家族に行動変容を求めることが難しい】【食支援を行うための実践的な知識・技術が乏しい】【多職種連携・協働が不十分】の3カテゴリが抽出された。また、在宅栄養専門管理栄養士による食支援に関する学習会への参加後の食支援に関する認識等の変化として、【食支援のアセスメントに関する視野の広がり】【食支援に対する意識の高まり】【療養者と家族への効果的な支援の実践】【管理栄養士の専門性への理解と多職種連携・協働の認識の高まり】の4カテゴリが抽出された。</p> <p>本人担当部分：研究計画、データ収集、分析、論文執筆 共著者：深山華織，三輪恭子，時岡奈穂子，岡野明美，小泉亜紀子</p> |
| 6. ケアマネジャーによる介護者の就労継続のための支援の特徴（査読付） | 共 | 2020年11月 | 日本産業看護学会第9回学術集会（WEB開催） | <p>目的：ケアマネジャーによる介護者の就労継続のための支援の特徴を明らかにすることとした。</p> <p>方法：対象者は、居宅介護支援事業所を利用する要介護者の就労介護者およびケアマネジャーとした。</p> <p>結果：ケアマネジャーが介護者の就労継続のための支援として必要があると回答した割合は、【不在時の環境調整】55.7%、【負担軽減支】73.6%、【心理的支援】66.5%、【チーム間の関係調整】54.5%であった。就労介護者のWIF・FIWと、【不在時の環境調整】との関連はみられなかった。就労介護者の労働時間や労働日数が長いほど、【不在時の環境調整】が必要であった。また、就労介護者のWIF・FIWが高いほど、【負担軽減支】【心理的支援】が必要であった。就労介護者の介護負担感や家事負担感が強いほど、【負担軽減支】が必要であった。さらに、就労介護者のWIFが高いほど、【チーム間の関係調整】が必要であった。</p> <p>本人担当部分：研究計画、データ収集、分析、論文執筆 共著者：深山華織，河野あゆみ</p> |
| 7. 介護支援専門員による家族介護者の就労継続のための支援（査読付） | 共 | 2019年7月 | 第24回 日本在宅ケア学会学術集会（於仙台国際センター） | <p>目的：ケアマネジャーが、家族介護者の就労継続のためにどのような支援を行っているかを明らかにする。</p> <p>方法：対象者は、就労介護者を支援しているケアマネジャー9人で、就労介護者の14事例に対する支援内容について半構成的面接調査を行った。データ分析は、佐藤の分析法をもとに定性的コーディングを行った。</p> <p>結果・考察：ケアマネジャーが介護者の就労継続のために行っている支援として、4つの支援【不在時の環境調整】【負担軽減支】【心理的支援】【チーム間の関係調整】に分類できた。</p> <p>本人担当部分：データ収集、分析、論文執筆 共同発表者：深山華織，河野あゆみ，白澤政和，高砂裕子，白木裕子，畑亮輔</p> |
| 8. 在宅高齢者の認知機 | 共 | 2018年12月 | 第38回 日本看護科 | <p>目的：本研究では、地域で生活する高齢者に対する教室への継続参</p> |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|---|---------|-----------|--|--|
| 2. 学会発表 | | | | |
| 能低下予防教室への継続参加と認知機能の関連（査読付） | 共 | 2018年7月 | 学学会学術集会（於ひめぎんホールほか） | 加状況と認知機能の関連を明らかにする。 方法：A市に居住する65歳以上の高齢者で、認知症の診断や治療を受けておらず、要介護度が自立から概ね要支援2までの者とした。教室に2年以上参加した高齢者154人を分析対象者とした。測定用具は、MMSE、うつ尺度（GDS）、QOL（VS法）尺度を用い、各年の教室参加時に測定した。 結果・考察：継続参加者の認知機能は、MMSEでは初回、最終参加時ともに性別による有意な差は見られなかった。MMSEの初回参加時得点でMCIの者に、最終参加時のMMSE得点の改善が多く見られたことは、教室への継続参加による効果と言える。 本人担当部分：教室の企画、データ収集 発表者：中村裕美子、深山華織、小泉亜紀子 |
| 9. Development of e-Learning System for Nurses to Learn Medical English and Chinese Conversation（査読付） | 共 | 2018年7月 | Development of e-Learning System for Nurses to Learn Medical English and Chinese Conversation（査読付） | 目的：日本人看護師の看護に関する英語や中国語会話を高めるための英語と中国語の会話学習eラーニングシステムを設計・開発する。 方法：文献検討により、教材コンテンツの項目を抽出した。語学学習の基本的枠組みを検討し、タブレット端末で視聴しながら学習できる医療会話学習eラーニングシステムを開発した。 結果・考察：会話コンテンツは、画面の文字情報と音声の読み上げを同期させ、外国語が繰り返し読み上げられることで、十分な発音練習ができるようにしている。さらに、短文で会話を構成しているため、記憶しやすく、文字テキストを読む能力と発音の聞き取りが容易にできる。また項目は、病院で遭遇することが多い場面であり、看護実践に活用しやすい内容である。 本人担当部分：教材の開発、データ収集 |
| 10. 認知機能低下予防教室における高齢者のロボットに対する反応と評価（査読付） | 共 | 2018年3月 | 教育システム情報学会 第43回全国大会（於北星学園大学） | 共同発表者：Yumiko Nakamura, Yukie Majima, Kaori Fukayama 目的・方法：本研究では、地域在住の高齢者を愛称とした認知機能低下予防教室において、コミュニケーションロボットを用いたアクティビティプログラムの試行と、複数のロボットの機能紹介とデモを行い、参加者の反応の観察と自記式質問紙による調査を実施した。 結果：高齢者は、触れたり、話しかけたりする親和的な反応を示し、興味をもっていた。希望する機能は、話し相手や予定の定時や指示が多く、写真や体操は少なかった。動物型ロボットに関心が高いことから、多様なロボットの機能開発と活用を検討していく必要がある。 本人担当部分：教室の企画、運営、データ収集 |
| 11. 就労しながら介護する男性介護者の仕事と介護の両立のためのセルフマネジメントの実践（査読付） | 共 | 2017年12月 | 第37回 日本看護科学学会学術集会（於仙台国際センター） | 共同発表者：中村裕美子、真嶋由貴恵、坂田信裕、深山華織 目的：就労しながら要介護高齢者を介護する男性介護者の仕事と介護の両立のためのセルフマネジメントの実践について明らかにする。 方法：対象者は、就労しながら要介護高齢者を介護している男性介護者9人で、データ収集方法は、半構成的面接調査とした。 結果：男性介護者が仕事と介護を両立し、生活を維持するためのセルフマネジメントとして、【介護をすることは自分の当然の役割である】【仕事を続けることに意義を持つ】【今のまま介護が続けられるよう自分で上手くやりくりする】【自分がないときにも元気で安全に過ごせるように調整する】【専門職に来てもらい、変化に対応してもらい】【状態が悪くなったときの対応策を考えている】【自分の心身の健康も大事にする】【自分がないときに、うまく行かない場合は仕方がない】【状態が悪くなることを考えたくない】の9カテゴリーが抽出された。 本人担当部分：研究計画、データ収集、分析 |
| 12. 在宅高齢者のための認知機能低下予防教室の参加者の認知機能と自宅課題の実践（査読付） | 共 | 2017年12月 | 第37回 日本看護科学学会学術集会（於仙台国際センター） | 共同発表者：深山華織、中村裕美子 目的：本研究では、認知機能低下予防教室（以下、教室）の参加者の認知機能と自宅で取り組む課題実施状況との関連を明らかにすることを目的とする。 方法：研究参加者は、A市居住の65歳以上の高齢者で、自力歩行が可能な認知症でない者78人とした。認知機能の測定尺度は、MMSEを用 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|---|---------|-----------|--------------------------------|---|
| 2. 学会発表 | | | | |
| 13. Effects of Student Learning Activities Using a Rubric Self-assessment Grid during Home Care Nursing Practicum (査読付) | 共 | 2017年3月 | The 20th EAFONS (於香港) | <p>い、教室開始時に測定した。</p> <p>結果・考察：参加者の認知機能について分析した結果、MMSEでは軽度認知機能障害の出現率は11.7%であった。自宅での課題の実施については、ドリルと百ます計算は認知機能との関連がみられず、取り組みの状況も高いことから、高齢者が取り組みやすい課題であるといえる。歩行については、認知機能が低くなると歩行歩数も少なくなっていたことから、認知機能の低下と日常生活の活動、歩行の低下が関連することが明らかになった。</p> <p>本人担当部分：教室の企画、運営、データ収集 共同発表者：中村裕美子、深山華織、松下由美子</p> <p>目的：本研究では、在宅看護学実習において、学生のルーブリック自己評価表を用いた学習活動の効果を明らかにすることを目的とした。</p> <p>方法：対象者は、在宅看護学実習を履修する3～4年次生131人。データ収集方法は、実習開始前と実習終了時に無記名自記式質問紙調査を行った。</p> <p>結果・考察：学生は、実習を通して学習活動が高まり、主体的に学習活動に取り組む学生は自己評価表の使用頻度が高いことが明らかになった。学生は、ルーブリック自己評価表を活用することで、ひとりで学習するだけでなく、グループメンバーとともに学ぶ姿勢を持つことができた。その結果、学生の学習活動が高まったと考える。</p> <p>本人担当部分：研究計画、データ収集、分析 共同発表者：Kaori Fukayama, Fumiko Okamoto, Yumiko Matsusuhita, Yumiko Nakamura</p> |
| 14. 在宅高齢者のための認知機能低下予防教室の継続参加状況からみた認知機能への効果 (査読付) | 共 | 2016年12月 | 第36回 日本看護科学学会学術集会 (於東京国際フォーラム) | <p>目的：本研究では、平成27年度の教室への新規参加者と、平成26度からの継続参加者の比較による教室参加の認知機能の低下予防への効果を明らかにすることを目的とする。</p> <p>方法：研究参加者は、A市居住の65歳以上の高齢者で、自力歩行が可能な認知症でない者78人とした。初回参加者は26人、継続参加者は52人であった。認知機能の測定尺度は、MMSE、ファイブコグテストを用いた。</p> <p>結果・考察：継続参加群と初回参加群でMMSEによるMCIの出現状況に有意な差はみられなかったが、ファイブコグテストでは、継続参加群で偏差値が有意に高い項目がみられた。認知症予防対策において地域の高齢者の主体的な参加を促す教室が重要な役割を果たすことが示された。</p> <p>本人担当部分：教室の企画、運営、データ収集 共同発表者：中村裕美子、深山華織、松下由美子</p> |
| 15. 在宅高齢者のための認知機能低下予防教室の継続参加状況からみた認知機能への効果 (査読付) | 共 | 2016年12月 | 第36回 日本看護科学学会学術集会 (於東京国際フォーラム) | <p>目的：本研究では、平成27年度の教室への新規参加者と、平成26度からの継続参加者の比較による教室参加の認知機能の低下予防への効果を明らかにすることを目的とする。</p> <p>方法：研究参加者は、A市居住の65歳以上の高齢者で、自力歩行が可能な認知症でない者78人とした。初回参加者は26人、継続参加者は52人であった。認知機能の測定尺度は、MMSE、ファイブコグテストを用いた。</p> <p>結果・考察：継続参加群と初回参加群でMMSEによるMCIの出現状況に有意な差はみられなかったが、ファイブコグテストでは、継続参加群で偏差値が有意に高い項目がみられた。認知症予防対策において地域の高齢者の主体的な参加を促す教室が重要な役割を果たすことが示された。</p> <p>本人担当部分：教室の企画、運営、データ収集 共同発表者：中村裕美子、深山華織、松下由美子</p> |
| 16. 在宅看護学実習においてルーブリック自己評価表を学生が使用することの有用性 (査読付) | 共 | 2016年12月 | 第36回 日本看護科学学会学術集会 (於東京国際フォーラム) | <p>目的：本研究では、在宅看護学実習を履修する学生がルーブリック自己評価表を使用することの有用性を明らかにすることを目的とした。</p> <p>方法：対象者は、在宅看護学実習を履修する3年次生66人で、実習開始前と実習終了時に無記名自記式質問紙調査を行った。</p> <p>結果・考察：自己評価表を多く活用している者は、グループメン</p> |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|---|---------|-----------|--|--|
| 2. 学会発表 | | | | |
| 17. 在宅高齢者のための認知機能低下予防教室の内容と参加者状況（査読付） | 共 | 2015年12月 | 第35回 日本看護科学学会学術集会（於広島国際会議場） | <p>バーとのコミュニケーションを図り、指導者や教員に助けを求めていたことから、ルーブリック評価表を使用する目的の1つである「他者とのコミュニケーションの活性化」が高められたと考える。</p> <p>本人担当部分：研究計画、データ収集、分析 共同発表者：深山華織、岡本双美子、松下由美子、中村裕美子</p> <p>目的：地域で生活する高齢者に対する教室における認知機能の維持・改善を目指した効果的なアクティビティについて検討することを目的とした。</p> <p>方法：対象者は、教室参加の高齢者で、自力歩行が可能な認知症でない者56人とした。MMSE、介護予防リスク「おたっしや21」、健康調査、体組成、握力、片足立ち時間、5m歩行速度を計測した。</p> <p>結果・考察：アクティビティにおいては、主に「空間認知力」「記憶力」「言語化能力」「手の巧緻性」の能力を刺激すること、身体運動と思考活動を並行して実施することに重点を置いた。また、各回で異なる媒体を用いたことで、参加者が自分にあった課題みつけるきっかけになったことが示唆された。</p> <p>本人担当部分：教室の企画、データ収集、分析 共同発表者：中村裕美子、深山華織</p> |
| 18. 就労しながら介護をする生活に対する女性介護者の心情（査読付） | 共 | 2015年11月 | 第5回 日本在宅看護学会学術集会（於聖路加国際大学） | <p>目的：就労しながら介護をする生活に対する女性介護者の心情を明らかにすることを目的とした。</p> <p>方法：対象者は、就労しながら高齢者を介護している女性介護者10人とした。半構成的面接調査を行い、質的記述的に分析した。</p> <p>結果・考察：就労しながら介護をする女性介護者は日々の生活に追われ、要介護高齢者の体調悪化や身体・認知機能の低下に伴う不安を抱えていたが、サービス提供者や職場など周囲のサポートによって安心感を得ていた。また、女性介護者は就労を継続することに経済的理由や楽しさを感じており、仕事と介護の両立への意欲となっていた。</p> <p>発表者：深山華織</p> |
| 19. Effectiveness and Utility of Terminal Tablet as Electric Textbooks for Nursing Practicum（査読付） | 共 | 2015年3月 | 11th International Conference on Mobile Learning 2015（於ブラジル） | <p>目的：既に開発され、A大学にて使用されている看護学習支援システムに基づいて、電子書籍の新たな機能を持つタブレット端末を開発した。本研究では、このタブレット端末を使用した評価の結果について報告することを目的とした。</p> <p>方法：対象は、4年生の看護学生のうち76人とした。自記式アンケート調査の主な調査内容は、端末タブレットの使用状況、時間、場所、インターネット接続の状況、内容の有用性、機能の評価などであった。</p> <p>結果・考察：学生が、持ち運びやすいタブレット端末を用いて、いつでも簡単に学習できることは学習効果を高めることができると期待できることが示唆された。</p> <p>本人担当部分：教材の開発、データ収集 共同発表者：Yumiko Nakamura, Kaori Fukayama, Yukie Majima</p> |
| 20. 在宅高齢者のための認知機能低下予防教室「脳いきいき教室」への継続参加の評価（査読付） | 共 | 2014年11月 | 第34回 日本看護科学学会学術集会（於名古屋国際会議場） | <p>目的：地域の高齢者を対象とした認知機能低下予防教室への継続参加による認知機能への効果を明らかにした。</p> <p>方法：対象者は、教室に6年間に参加した164名である。認知機能の測定尺度としてMMSEとファイブ・コグを用いた。初回との比較データが得られた84名を対象に継続参加者（以下、継続群）、単年度参加者（以下、単年度群）別に分析を行った。</p> <p>結果・考察：対象の教室への継続参加は、加齢による認知機能の低下よりも、認知機能の記憶力や思考力を維持あるいは改善する効果が得られた。継続参加の効果が示されたことは、高齢者の認知機能が訓練により維持・改善できる可能性が示唆された。</p> <p>本人担当部分：教室の企画、運営、データ収集 共同発表者：中村裕美子、深山華織、北島洋子</p> |
| 21. 病棟看護師の退院支援に関する認識の変化—患者の退院後にHappy life通信を受けて—（査読付） | 共 | 2014年10月 | 第4回 在宅看護学会学術集会（於東邦大学看護学部） | <p>目的：訪問看護師から患者の退院後の状況報告を受けたことによる退院支援に関する認識の変化を明らかにすることを目的とした。</p> <p>方法：対象は、病棟看護師11名とし、半構成的面接法によるインタビューを行い、質的記述的に分析した。</p> <p>結果・考察：訪問看護師から退院後の状況報告を受けることで、病</p> |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|---|---------|-----------|------------------------------------|---|
| 2. 学会発表 | | | | |
| 22. Changes in unit nurses' discharge support before and after intervention using feedback reports about the patient's life-style at home after discharge (査読付) | 共 | 2014年5月 | 第35回 国際ヒューマンケアリング学会 (於国立京都国際会館) | <p>棟看護師は退院支援そのものに戸惑っていた看護師側の視点から、患者家族の意思を尊重するという患者家族への視点に焦点が変化したことが明らかになった。</p> <p>本人担当部分：データ収集、分析 共同発表者：田端支普、岡本双美子、大橋奈美、春岡登志子、笹山志帆子、玉森道子、深山華織、中村裕美子</p> <p>目的：A病院は、B訪問看護ステーションから退院後の患者の状況報告を受けている。退院後の患者の状況報告を受ける前後において、病棟看護師の退院支援の変化を明らかにすることを目的とした。</p> <p>方法：対象は、A病院の病棟看護師11名とし、半構成的面接法によるインタビューを行った。</p> <p>結果・考察：病棟における退院支援の内容について質的記述的に分析した結果、病棟看護師による退院支援は一方的な支援から双方向の支援に変化したことが明らかになった。</p> <p>本人担当部分：データ収集、分析 共同発表者：Fumiko Okamoto, Nami Ohashi, Toshiko Haruoka, Kaori Fukayama, Yumiko Nakamura, Shiho Tabata, Sachiko Sasayama, Michiko Tamamori</p> |
| 23. 在宅高齢者の認知機能低下予防教室への経年参加による認知機能の変化 (査読付) | 共 | 2013年10月 | 第72回 日本公衆衛生学会総会 (於三重県総合文化センター) | <p>目的：地域の高齢者を対象とした認知機能低下予防教室への経年参加による認知機能に対する変化を明らかにした。</p> <p>方法：教室に参加した71名を対象とし、認知機能の経年変化について、初回参加時のMMSE 得点を基準に、2012年度のMMSE得点との対応のあるT検定を行った。</p> <p>結・考察：対象者が教室へ継続参加することは、加齢による認知機能の低下よりも認知機能の記憶力や思考力を維持する、改善することに効果が得られていた。</p> <p>本人担当部分：教室の企画、運営、データ収集 共同発表者：中村裕美子、深山華織</p> |
| 24. Terminal Tablet as Electric Textbooks for Nursing Practicum (査読付) | 共 | 2013年7月 | 15th HCII 2013 (於アメリカ) | <p>目的：看護実習におけるタブレット端末を用いた学習への有効性を検証するための性能の評価を明らかにすることを目的とした。</p> <p>方法：対象者は、A大学の看護学生62人とし、一定期間タブレット端末を使用してもらい、学習への有効性について質問紙調査を用いて回答してもらった。</p> <p>結果・考察：タブレット端末の電子コンテンツの中で、看護スキルビデオが頻繁に使用された。学生が実習で患者の援助をする前に、事前に看護スキルを確認する必要があるために使用しており、学生の学習支援の助けになっていた。</p> <p>本人担当部分：教材の開発、データ収集 共同発表者：中村裕美子、深山華織</p> |
| 25. Evaluation of a web-based mentor functional system for employment support training of nurses who have not been employed | 共 | 2013年2月 | Health INF 2013 (於スペイン) | <p>目的・方法：潜在看護師の就職支援訓練のために開発したeラーニングによるメンター機能システムについて、評価するためにアンケート調査と、使用した14人にグループインタビューを実施した。</p> <p>結果・考察：メンター機能システムでは、潜在看護師が疑問や質問をメンターから回答を受け取ることは彼らの懸念が緩和された。また、看護技術や新たな知識の習得にも効果的であることが分かった。</p> <p>本人担当部分：教材の開発、データ収集 共同発表者：中村裕美子、真嶋由貴恵、深山華織</p> |
| 26. 電子教科書と電子教材を搭載したタブレット端末の臨床実習への適応 (査読付) | 共 | 2013年1月 | 第7回 医療系eラーニング全国交流会 (於徳島大学) | <p>目的：潜在看護師の就職支援訓練のための、eラーニングによるメンター機能システムを開発した。本研究では、研究対象者に実証的調査を実施し、メンターに機能するシステムのシステム機能と利便性を高めるために必要なことについて明らかにすることを目的とした。</p> <p>方法：対象者は、再就職のためのトレーニング・ワークショップに参加した19人で、1ヶ月間自己学習用に開発されたトレーニングプログラムを使用後にグループインタビューを行った。</p> <p>結果・考察：質的記述的に分析した結果、ウェブによるメンター機能システムは、学習をサポートすることができ、それが潜在看護師の復職する際に関連する懸念を減らすことができることが示唆され</p> |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|--|---------|-----------|--------------------------------|---|
| 2. 学会発表 | | | | |
| 27. 地域高齢者の認知機能低下予防のための集団プログラムへの参加による認知機能の効果（査読付） | 共 | 2012年12月 | 第32回 日本看護科学学会学術集会（於東京国際フォーラム） | <p>本人担当部分：教材の開発、データ収集 共同発表者：中村裕美子，真嶋由貴恵，深山華織</p> <p>目的：地域で生活する高齢者の認知機能の低下を予防するための効果的な集団プログラムを開発し、継続参加による認知機能に対する効果を明らかにする。</p> <p>方法：本プログラムの特徴は、教室時だけでなく、自宅での課題を継続して取り組むところに特徴がある。</p> <p>結果・考察：教室への継続参加により、高齢者の認知機能を向上させることに効果を発揮していた。特に運動（書字）、判断や記名力を保つことに対して効果がみられた。また、MMSEの満点者以外でも効果がみられたことから、認知機能の維持に効果的なプログラムであることが明らかになった。</p> |
| 28. 看護職のための再就職支援研修プログラムにおけるメンター補助機能システムの検証（査読付） | 共 | 2012年8月 | 教育システム情報学会 第37回全国大会（於千葉工業大学） | <p>本人担当部分：教室の企画、運営、データ収集 共同発表者：中村裕美子，深山華織，牧野裕子</p> <p>目的・方法：看護業務に従事していない看護師の再就職を支援するeラーニングによる研修プログラムにあわせて利用できるメンター補助機能システムを開発した。このシステムを利用した14名のモニターによる1ヶ月間の利用後に構成的質問紙およびグループインタビュー法により評価を行った。</p> <p>結果・考察：メンター補助機能システムへの質問内容は、看護技術や新しい情報の問い合わせが多く、メンターへの相談により再就職に対する不安の軽減が図られていたことから、メンター補助機能システムは効果的に活用できていた。</p> |
| 29. 日中独居で過ごす要介護高齢者の不安とその対処（査読付） | 単 | 2011年12月 | 第31回 日本看護科学学会学術集会 | <p>本人担当部分：教材の開発、データ収集 共同発表者：中村裕美子，真嶋由貴恵，深山華織</p> <p>目的：日中独居で過ごす要介護高齢者の不安を生じさせる事柄とその対処について明らかにすることを目的とした。</p> <p>方法：対象は日中独居高齢者10名とし、調査は半構成的面接法を用いて、質的記述的に分析した。</p> <p>結果・考察：日中独居高齢者は自分の身体状況から転倒などに対する予期的心配を抱いていた。また、日中独居高齢者は、生理的欲求を満たせないことや有意義な生活を送れない状況によって心理的な影響を受けていた。これらへの対処として、問題焦点型対処と情緒焦点型対処を行っていた。</p> |
| 30. 認知機能低下予防教室参加者の日常活動における予防行動の定着状況（査読付） | 共 | 2011年11月 | 第70回 日本公衆衛生学会総会（於秋田県民会館ほか） | <p>発表者：深山華織</p> <p>目的：地域で生活する虚弱な高齢者を対象に開催している「認知機能低下予防教室」参加者の、認知機能低下のための「予防行動」の日常生活での定着状況を明らかにすることを目的とした。</p> <p>方法：フォローアップ教室時のグループインタビューによって語られた内容を記述し、質的に分析した。</p> <p>結果・考察：教室終了3か月後も5割以上の者が課題を実施していることや、個別に応用していることから、本教室は予防行動の動機づけと行動化を促すことができている。</p> <p>本人担当部分：教室の運営、データ収集 共同発表者：牧野裕子，中村裕美子，今川志津子，深山華織，太田暁子</p> |
| 3. 総説 | | | | |
| 1. 地域におけるエンド・オブ・ライフケアを拡充するための基盤構築に向けての海外研修（査読付） | 共 | 2016年3月 | 大阪府立大学看護学雑誌 第23巻 第1号 p.75～p.82 | <p>米国ハワイ州でホスピスケアに先進的に取り組むHospice Hawaiiと医療系専門職を目指す学生を対象としたシミュレーションセンターでの教育を実施しているハワイ大学での研修を通して、看護師の役割を検討した。看護師の役割として、その人らしい最期を迎えられるよう、必要な情報提供を行い、環境を整え、適切な時機に医師やSW等の専門職の援助が受けられるように調整し、患者と家族が最善と思える意思決定ができるように支えることであると考えた。</p> <p>本人担当部分：データ整理、文章校正 共著者：江口恭子，志田京子，香川由美子，松下由美子，深山華織，岡本双美子</p> |
| 2. 看護学生へのタブ | 共 | 2013年7月 | 臨床看護，39巻11 | 特集「看護師人材育成に活かすe-learning」の中で「基礎看護教育 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|---|---------|-----------|--|---|
| 3. 総説 | | | | |
| レットPCによる臨地実習での学習支援と臨床への応用 3.連載 患者と医療従事者のための闘病記ガイド「天空からの邂逅」 | 単 | 2008年8月 | 号, p.1480～p.1485 呼吸器ケア, 6巻8号, p.94 | における人材育成とe-learning 看護学生へのタブレットPCによる臨地実習での学習支援と臨床への応用」をテーマに解説を行った。 共著者：中村裕美子, 真嶋由貴恵, 深山華織 呼吸器疾患に関する闘病記の紹介を行った。 著者：深山華織 |
| 4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績 | | | | |
| 5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| 1.暮らしの保健室における住民育成活動 | 共 | 2023年3月 | 大阪公立大学大学院看護学研究科看護実践研究センター年報, 第1巻, p.31～p.36 | 地域において複数の介護事業を運営する事業所の住民交流スペースの立ち上げ・企画に参画するとともに、「暮らしの保健室」として“となりの保健室”を4回開催し、住民の健康増進にむけた活動を行うこととした。 各回参加者は10～11名で、80代の参加者が多く、現在の健康に関する懸念だけでなく、将来の健康や介護、生活に対する不安があることが示唆された。参加者は、カフェの利用者からテーマに関する不安を抱える地域住民へと声をかけられ、参加につながったケースもあり、となりの保健室を拠点に住民同士の交流の活性化や健康増進の一助になったと考えられる。参加者の感想や理解度から、健康や暮らしのニーズに合った内容が提供できたと考える。 本人担当部分：企画運営、データ収集、分析 共著者：深山華織, 三輪恭子 |
| 2.訪問看護ステーションにおける栄養アセスメント・モニタリングシートの活用支援 | 共 | 2022年3月 | 大阪府立大学大学院看護学研究科療養学習支援センター年報, 第18巻, p85～p.90 | 訪問看護師による食支援をさらに充実させることを目的として、訪問看護師が在宅療養者の栄養状態を把握し、適切な継続支援につなげるための栄養アセスメント・モニタリングシートを作成し、その活用支援を行った。訪問看護師は栄養アセスメントシートの活用により、必要なアセスメントの項目がわかり、丁寧に確認することで課題を導くことができた。また、課題に対して管理栄養士の助言をもとに支援を行い、モニタリングシートで継続的に評価することができていた。 本人担当部分：企画運営、データ収集、分析 共著者：深山華織, 三輪恭子 |
| 3.訪問看護師と在宅管理栄養士のコラボレーションの促進 | 共 | 2021年3月 | 大阪府立大学大学院看護学研究科療養学習支援センター年報, 第17巻, p.31～p.36 | 訪問看護ステーションにおいて、在宅栄養専門管理栄養士による食支援に関する学習会を実施し、参加した訪問看護師らから高評価が得られた。食支援は、生活支援の重要な要素であり生命・生活の維持に直結することから、訪問看護師の関心は高かった。しかし、訪問看護師が体系的に学習する機会は少なく、在宅の場の特徴や利用者の状況から不全感や困難感を感じていた。本活動では、各事業所における講義と事例検討を組み合わせた学習会であったことから、基本的な知識とともに、実際の事例について丁寧に振り返り、管理栄養士から実践につながる具体的な助言を得られていた。 本人担当部分：企画運営、データ収集、分析 共著者：三輪恭子, 深山華織, 小泉亜紀子, 岡野明美 |
| 4.在宅高齢者のための認知機能低下予防教室への参加による認知機能への効果 | 共 | 2018年3月 | 大阪府立大学大学院看護学研究科療養学習支援センター年報, 第14巻, p.23～p.28 | 本研究では、地域で生活する虚弱な高齢者に対するグループ支援を通し、認知機能の維持・改善を目指した効果的なケアプログラムを開発し、アクティビティの評価および、継続参加による認知機能の低下予防の効果について検討することを目的とした。アクティビティは、お手玉やパズルを用いた空間認知力、ゲームをする計画力、思い出を思い出して語るエピソード記憶力などの認知機能を刺激するものであった。認知機能は教室への参加により維持、改善されており、とくにMCIの改善に効果が見られた。 本人担当部分：教室の企画、運営、データ収集 共著者：中村裕美子, 松下由美子, 深山華織 |
| 5.「学会 交流集会」地域包括ケアシステムを支える人材育成と専門看護師ネット | | 2017年12月 | 第37回日本看護科学学会学術集会 (於仙台国際セン | 大阪府立大学大学院看護学研究科において平成28年度よりNS-Coプロジェクトを展開している。本プロジェクトでは、在宅医療を担う訪問看護師や医療機関の退院調整看護師の人材育成と、CNSをはじめとした在宅医療関係職種との活動や情報のネットワーク形成を行い、そ |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|---|---------|-----------|--|--|
| 5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| ワークシステムとのシナジーモデルの構築 | | | ター) | れらに基づいて効果的なシナジーモデルの構築を行うことを目的としている。交流会では、プロジェクトの活動概要を紹介し、地域包括ケアシステムの構築のために看護教育と地域での看護実践のための相互交流や融合が行われ、シナジー効果を発揮できるモデル構築を進めていくために、大学が地域に向けてどのような寄与ができるのか、参加者の皆様とともに検討を深めた。 本人担当部分：会場設営、受付 共同発表者：中村裕美子、簗持知恵子、榎木野裕美、岡本双美子、長畑多代、志田京子、細田泰子、北村愛子、渡邊香織、深山華織、田中京子、南村二美代、堀井理司 |
| 6. 在宅高齢者のための認知機能低下予防教室の経年参加による効果 | 共 | 2017年3月 | 大阪府立大学大学院看護学研究科療養学習支援センター年報、第13巻、p.10～p.17 | 本研究では、地域で生活する虚弱な高齢者に対するグループ支援を通し、認知機能の維持・改善を目指した効果的なケアプログラムを開発し、アクティビティの評価および、継続参加による認知機能の低下予防の効果について検討することを目的とした。アクティビティは、地図やパズルを用いた空間認知力、ゲームをする計画力、思い出を思い出して語るエピソード記憶力などの認知機能を刺激するものであった。また、自宅での課題は、認知機能が低くても取り組めるのはドリルや計算、日記であり、取り組みづらいのは歩行であることが明らかになった。認知機能とうつ傾向、生活の質も関連がみられることから、今後も、参加者の状況に合った、参加者が自分にあった課題みつけ、日常生活で活用できるように媒体にも留意し、プログラム内容を検討していく必要がある。 本人担当部分：教室の企画、運営、データ収集 |
| 7. 在宅高齢者のための認知機能低下予防教室への参加による認知機能への効果「脳いきいき教室」のアクティビティと参加状況 | 共 | 2016年3月 | 大阪府立大学大学院看護学研究科療養学習支援センター年報、第12巻、p.10～p.17 | 本研究では、地域で生活する虚弱な高齢者に対するグループ支援を通し、認知機能の維持・改善を目指した効果的なケアプログラムを開発し、アクティビティの評価および、継続参加による認知機能の低下予防の効果について検討する。アクティビティは、いくつかの決められた形のパーツを組み合わせてイメージしたものを形づくる、塗り絵や折り紙など手先を使うこと、無から何かを生み出す創造することなど、いろいろな認知機能を刺激するものであった。また、継続参加によって認知機能の低下を予防していることが明らかになった。今後も、参加者のニーズをふまえながら、一人一人が自分にあった課題みつけ、活用する媒体にも留意し、アクティビティ内容の工夫をしていく。 本人担当部分：教室の企画、運営、データ収集 共著者：中村裕美子、松下由美子、深山華織 |
| 8. 在宅高齢者のための認知機能低下予防教室の経年参加による効果「脳いきいき教室」初年度の参加状況とアクティビティ | 共 | 2015年3月 | 大阪府立大学大学院看護学研究科療養学習支援センター年報、第11巻、p.22～p.29 | 本研究は、地域で生活する虚弱な高齢者に対するグループ支援を通し、認知機能の維持・改善を目指した効果的なケアプログラムを開発し、アクティビティの評価することを目的とした。アクティビティで用いた媒体は、いくつかの決められた形のパーツを組み合わせてイメージしたものを形づくる「ブロック」、足踏みと拍手を同時に行う、ジャンケンという基本的な「単純な動作」、点つなぎと話を作るという「パズル」であり、それぞれの回で異なる特性を有する媒体を用いた。今後も、参加者のニーズをふまえながら、一人一人が自分にあった課題みつけ、活用する媒体にも留意し、ますますバリエーションを拡げてゆけるよう、アクティビティ内容の工夫をし必要がある。 本人担当部分：教室の企画、運営、データ収集 共著者：中村裕美子、松下由美子、深山華織 |
| 9. 在宅高齢者のための認知機能低下予防教室「脳いきいき教室」への継続参加の評価 | 共 | 2014年3月 | 大阪府立大学大学院看護学研究科療養学習支援センター年報、第10巻、p.23～p.32 | 「脳いきいき教室」のアクティビティの評価および、経年参加による認知機能の低下予防への効果について検討することを目的とした。教室への継続参加による認知機能の評価を行なった結果、継続参加による効果が示され、参加者の認知機能が訓練により維持・改善できる可能性を示すことができた。 本人担当部分：教室の企画、運営、データ収集 共著者：中村裕美子、深山華織 |
| 10. 在宅高齢者のための認知機能低下予防教室 | 共 | 2013年3月 | 大阪府立大学大学院看護学研究科 | 地域の高齢者の認知機能低下を予防するためのプログラム「脳いきいき教室」を開催し、7年間で164名の参加者を得た。教室への参加 |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---------|--------------------|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| 室「脳いきいき教室」への経年参加による変化 11. 在宅高齢者のための認知機能低下予防教室「脳いきいき教室」におけるアクティビティの評価 | 共 | 2012年3月 | 療養学習支援センター年報, 第9巻, p.21～p.30 大阪府立大学大学院看護学研究科療養学習支援センター年報, 第8巻, p.12～p.22 | <p>効果を明らかにするために参加者の継続参加による認知機能の評価を行なった。結果、参加者の継続参加の効果が示され、認知機能が訓練により維持・改善できる可能性を示すことができた。</p> <p>本人担当部分：教室の企画、運営、データ収集 共著者：中村裕美子, 深山華織</p> <p>地域の高齢者の認知機能低下を予防するための効果的なプログラムを開発し評価することを目的に「脳いきいき教室」を開催した。本研究は教室で行うアクティビティについて、参加者に対して行ったプログラム内容に関するアンケート内容を分析した。結果、各アクティビティの題材は、目的に沿った内容であったものであった。参加者のニーズをふまえながら、一人一人が自分にあった課題みつけれられるよう工夫が必要であった。</p> <p>本人担当部分：教室の企画、運営、データ収集 共著者：牧野裕子, 中村裕美子, 深山華織</p> |
| 6. 研究費の取得状況 | | | | |
| 1. 就労介護者のキャリア形成における意思決定に影響を及ぼす要因の検証 | | 2022年4月～現在 | 科学研究費 基盤研究 (C) 研究代表者 4,160千円 (直接経費: 3,200千円, 間接経費: 960千円) | <p>課題番号: 22K11182</p> <p>本研究では、就労介護者のキャリア形成への意思に及ぼす影響を検証する。</p> <p>調査Ⅰでは、労働者と産業保健師、人事労務担当者を対象としたインタビュー調査をとおり、仕事と介護の両立およびキャリア形成のための課題について明らかにする。</p> <p>調査Ⅱでは、労働者を対象にした縦断調査をとおり、仕事と家庭の多重役割を担う就労介護者のキャリア形成に及ぼす要因について明らかにする。</p> <p>研究代表者: 深山華織 研究分担者: 三輪恭子, 牛冰</p> |
| 2. 就労している家族介護者へのサポート状況によるワーク・ライフ・バランスへの影響 | | 2017年4月～2020年3月31日 | 科学研究費 基盤研究 (C) 研究代表者 3,250千円 (直接経費: 2,500千円, 間接経費: 750千円) | <p>課題番号: 17K12473</p> <p>目的: 本研究では、要介護高齢者のセルフマネジメント、インフォーマルサポート、フォーマルサポートと就労介護者のワーク・ライフ・バランスとの関連について明らかにすることである。</p> <p>方法: ケアマネジャーを対象とした半構成的面接および全国の居宅介護支援事業所を利用する就労介護者3000名を対象とした郵送調査を実施した。</p> <p>結果: 本研究では、ケアマネジャーによる介護者の就労継続のための支援として、【不在時の環境調整】【負担軽減支援】【心理的支援】【チーム間の関係調整】が行われていることが明らかになった。また、就労介護者のWork-Family Conflictに応じた支援を行っており、就労介護者のWIF・FIWが高いほど、【負担軽減支援】【心理的支援】を行っていることが明らかになった。</p> <p>研究代表者: 深山華織</p> |
| 3. Global人材育成のための英語版看護事例学習用eラーニングシステムの開発と評価 | | 2014年4月～2018年3月 | 科学研究費 基盤研究 (B) 研究分担者 16,510千円 (直接経費: 12,700千円, 間接経費: 3,810千円) | <p>課題番号: 26293450</p> <p>目的: 本研究では、日本人看護学生の英語力と外国人看護師候補生などの日本語力を高めるための英語版看護学習サポートシステム、およびシステムに搭載する英語教材コンテンツを開発し、複数大学の看護学生を対象にシステムの機能、利便性、教育効果に関する評価を行うこととした。</p> <p>方法: (1) eラーニングによる英語版看護学習サポートシステムの開発: Webおよびタブレット端末などで展開できるシステムを開発し、システムの検証を行う。(2) 看護ESP教材の開発: 既開発のコンテンツの中から事例教材の会話とテキストを英訳し、教材コンテンツを制作する。(3) システムの評価・実用性の検証: システムの利便性、有用性、学習効果などについて評価を行う。</p> <p>結果: 開発した看護学習サポートシステムやESP教材を大学院生や学部生に使用してもらい評価した結果、十分な機能を有しており、実用性が高いことが示された。</p> <p>研究代表者: 中村裕美子 研究分担者: 深山華織, 真嶋由貴恵</p> |
| 4. 日中独居高齢者を支える男性介護者の仕 | | 2014年4月～2017年3月 | 科学研究費 若手研究 (B) | <p>課題番号: 26861961</p> <p>目的: 就労しながら要介護高齢者を介護する男性介護者の仕事と介</p> |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|--|---------|---------------------|---|--|
| 6. 研究費の取得状況 | | | | |
| 事と介護の両立のためのセルフマネジメント | | 31日 | 研究代表者 1,170千円（直接経費：900千円、間接経費：270千円） | 護の両立のためのセルフマネジメントの実際について明らかにする。 方法：対象者は、就労しながら要介護高齢者を介護している男性介護者9人で、データ収集方法は、半構成的面接調査とした。 結果：男性介護者が仕事と介護を両立し、生活を維持するためのセルフマネジメントとして、【介護をすることは自分の当然の役割である】【仕事を続けることに意義を持つ】【今のまま介護が続けられるよう自分で上手くやりくりする】【自分がいなくても元気で安全に過ごせるように調整する】【専門職に来てもらい、変化に対応してもらい】【状態が悪くなったときの対応策を考えている】【自分の心身の健康も大事にする】【自分がいなくても、うまく行かない場合は仕方がない】【状態が悪くなることを考えたくない】の9カテゴリーが抽出された。 |
| 5. 要介護高齢者を支える同居家族の日中留守にすることによる心情 | | 2012年4月～ 2015年3月 | 科学研究費 若手研究 (B) 研究代表者 910千円（直接経費：700千円、間接経費：210千円） | 研究代表者：深山華織 課題番号：24792580 目的：就労しながら介護をする生活に対する女性介護者の心情を明らかにすることを目的とした。 方法：対象者は、就労しながら高齢者を介護している女性介護者10人とした。半構成的面接調査を行い、質的記述的に分析した。 結果・考察：就労しながら介護をする女性介護者は日々の生活に追われ、要介護高齢者の体調悪化や身体・認知機能の低下に伴う不安を抱えていたが、サービス提供者や職場など周囲のサポートによって安心感を得ていた。また、女性介護者は就労を継続することに経済的理由や楽しさを感じており、仕事と介護の両立への意欲となっていた。 |
| 6. 看護職のための再就職支援研修プログラムにおけるメンター機能システムの開発と評価 | | 2011年4月～ 2014年3月 | 科学研究費 基盤研究 (B) 研究分担金 18,720千円（直接経費：14,400千円、間接経費：4,320千円） | 研究代表者：深山華織 課題番号：23390493 目的：本研究では、先行研究で開発した潜在看護師の再就職支援プログラムに合わせて利用できる利用者へのメンター機能システムの開発と実証実験と行うこととした。 方法：インターネット上のメンターによる学習サポートシステムの検討を行い、必要な機能を抽出し、先行研究で開発したシステムの改善、開発を行った。タブレット端末を使用して、本研修システムの利用者を対象として、メンターシステム利用群と未利用群との比較により、メンターシステムの利便性、有用性、支援効果などについて評価を行った。 結果：54名のモニターによる2か月間の利用後に質問紙により評価を行い、看護技術の動画の活用が多く、メンター機能による学習サポートの効果が明らかになった。 研究代表者：中村裕美子 研究分担者：真嶋由貴恵，前川泰子，深山華織，星和美 |

学会及び社会における活動等

| 年月日 | 事項 |
|---------------------|------------------------------|
| 1. 2023年4月～2023年12月 | 第28回日本在宅ケア学会学術集会 運営委員 |
| 2. 2022年4月～2024年3月 | 羽曳野市羽曳が丘にて「暮らしの保健室」を開催 |
| 3. 2021年3月～現在 | 日本産業看護学会編集委員会 査読委員 |
| 4. 2019年2月～現在 | 日本ケアマネジメント学会 学会員 |
| 5. 2019年2月～現在 | 日本地域看護学会 学会員 |
| 6. 2018年10月～現在 | 日本在宅ケア学会 学会員 |
| 7. 2016年6月～現在 | 日本老年看護学会 査読委員 |
| 8. 2016年1月 | 第10回医療系e-ラーニング全国交流会 事務局 |
| 9. 2014年4月～現在 | 日本在宅看護学会 学会員 |
| 10. 2011年4月～現在 | 日本老年看護学会 学会員 |
| 11. 2011年4月～現在 | 日本公衆衛生学会 学会員 |
| 12. 2011年4月～現在 | 日本看護科学学会 学会員 |
| 13. 2011年4月～2019年3月 | 地域住民に向けた認知機能の低下予防教室「脳いきいき教室」 |